

日本語教育現場報告

－台湾 治平高級中学の場合－

莊 雅 婷

(平成21年 別府大学文学部国文学科日本語教員養成課程修了)

1. はじめに

昔から台湾と日本は関係が深い。日本人が台湾を統治していたとき、台湾の基礎が築かれた。例えば、ジューロンの港や台湾ではじめての鉄道(台北から南の方まで)や阿里山の開発など、すべて日本人の計画のもとで行われたものである。また、歴史上のさまざまな事件も、日本と台湾の関係を深くした。今でも、台湾では日本語は英語に次いで学習者の多い外国語である。最も学習者が多いのは、高等教育機関である。近年は外国語教育政策と若者の「日本ブーム」の影響を受け、中等教育機関における日本語学習者も増えてきた。塾などの学校教育以外の機関での学習者も多い。総人口に占める割合で見ると、世界最高水準にあると言えよう。

筆者は台湾の桃園にある「治平高級中学」という私立高校に勤務している。本校は別府大学とも国際交流を行っている。

現在勤務している治平高校は授業以外にも多様な学習環境があり、部活動やサークル活動などを通じて学習者の意欲をわかせる。これが本校の特色である。

2. 治平高級中学における日本語教育

本校は美容学科やコンピューター学科、応用日本語学科など様々な学科がある。

治平高校の教育理念は

1. 「学問を強化し、研究し続け、将来、社会に役に立つ人材になれ。」
2. 「勉強以外に、一つ技能を持つ事が大切であり、そういう技能を持って、社会の経済発展と国家建設に貢献しよう。」
3. 「道徳や責任感がある若者になり、社会のルールを遵守できる学生を確立する。」
4. 「多機能の体育館を作り、体育運動を強化

し、精神と身体を共に育成する。」

5. 「真摯な態度で助け合いながら、正々堂々とした人間になれ。」

治平高校の歴史は1964年に王鴻達、洪忠梅によって創立されたことに始まる。そして、1967年に二部が創立された。治平高校の一部は9つの学科があり、普通学科・総合学科・外国語学科・美容学科・幼保学科・資料学科・資質学科・電機学科・電子学科である。二部は6つの学科があり、普通学科・外国語学科・美容学科・資料学科・資質学科・電機学科である。このうち、日本語教育は外国語学科で行われている。日本語教育の教育理念は「場面と目的に応じて二つの外国語を交互に使用できる」である。日本語以外に英語も重要な科目として学習する。また、学校で学習したものは、国際交流や交換学生などのチャンスに生かされる。さらに、一部は日本語能力試験N4を取らないと卒業できない、二部は日本語能力試験N5を取らないと卒業できないと決まっており、日本語能力試験合格が大きな課題である。

カリキュラムは一年生では興味を引かせることが大切であるため、ゲームやロールプレイなどを多く取り入れた楽しい授業を行っている。目標は『新・日本語の基礎Ⅰ』と『新・日本語の基礎Ⅱ』を終わらせること。二年生から日本語能力試験を目指して、主に試験内容と過去問題を学ぶ。目標は日本語能力試験N5に合格すること。三年生も日本語能力試験を目指しているが、それ以外にも作文や会話などの授業も行っている。目標は日本語能力試験N4に合格することである。

受講生の卒業進路については、主に二つに分けられる。一つは進学で、もう一つは就職である。進学の場合は大学と専門学校があり、日本

語学科や観光学科、商学部など、日本語と関連がある学科を目指す者が多い。就職の場合はサービス業やガイド、通訳の補佐役などが主な就職先となる。

3. 教育現場の実際

3.1. 学生指導の現状と課題

筆者は二部の応用日本語学科で日本語を教えている。筆者は担任でもあるので、授業だけではなくクラス運営もしなければならない。そのため、いつも考えることは学生にとってどんな教師が理想の教師なのか、どうすればいい教師になれるのかということである。高校に入って、3ヵ月経った。授業よりクラスの運営の方がさらに大変で難しいと感じている。出席率や服装検査、環境評価などいちいち学生に注意しなければならない。しかし、二部の学生は一部の学生と違い、生徒のほとんどが仕事を持っており、社会経験もあるためプライドが高い。従って、

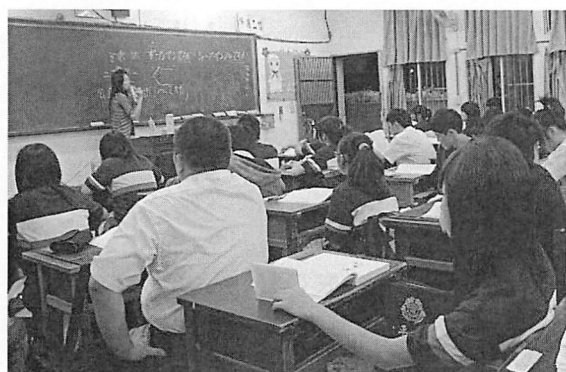


図1 筆者による授業(1)

従来の教え方ではクラス運営がうまく進められない。お互いに対等な立場で尊重しながら進めていくほうがうまくいく。しかしそれでも、たまに学生が教師の言うことを聞かなくなったり、クラスのルールを無視したりする事がある。それは教師を友達だと勘違いしているためだ。そのような場合、ある程度厳しくしないとクラスの運営が崩れてしまう。以前は、やさしくて、親切で、それに絶対学生を叱らない教師が理想の教師だと思っていた。しかし、今教師になって、そういう考えはあまいと感じている。なぜなら、学生たちに礼儀をしっかりと教えない、悪いことしても怒らないと、いい学生が不安になるからだ。学校は怖い所だと思われるかもし

れないし、いい学生の両親も安心して学生を本校に預けることができない。従って、ある程度厳しくすることも必要である。

しかし、一方でそういう厳しさを学生たちに納得してもらわなければならない。最近ある同僚が学生を叱った。叱った理由は正しかったが、叱り方がよくなかったため、かえって学生の両親に非難された。私もこの件についてよく考えた。その教員の出発点は間違っておらず、学生がよくなるためを思って叱ったのだが、なぜ逆に叱られたのか。それは、そのときその教員も怒っていたため、相手の理由もしっかり聞かずに叱ったからだ。その教員の話し方も悪かったため、逆に叱られたのだ。もし、今後そのようなことに遭遇したら、いきなり叱るのではなく、先に理由を聞き、自分の気持ちを抜いて冷静に納得できる叱り方をしようと思う。コミュニケーションを通じて、生徒一人一人を理解していくことと、ある程度厳しさを持つことがいい教員になるための基本だと思う。

以上が今までクラスを運営してきた所感である。

3.2. 日本語教育の現状と課題

現在、教育現場の課題は2つある。1つは学習者の学習意欲とクラス運営の問題だ。一年生は54人、レベルは初級で、使用教材は『新・日本語基礎』上・下、週に8コマがある。目標は『新・日本語基礎』上・下を終わらせて基本的な文法を習得することだ。二年生は38人、レベルは初中級で、使用教材は『新文化初級日本語』と『全方位4級』で、週に11コマある。目標は日本語能力試験N5に合格することだ。三年生は33人、レベルは中級で、使用教材は『日本語作文』と『完全掌握3級』と『適時適所日本語表現句型200』で、週に16コマある。目標は日本語能力試験3級に合格することだ。

問題は、真面目に授業をうける生徒もいれば、不真面目な生徒もいることだ。つまり1つのクラスの中の学習意欲の差が激しい。また、本校は各学年ごとに1つのクラスしかないためクラス分けができない。必然授業が進めにくい。ゆっくりやるとできる学生がつまらないと思ってし

まい、速すぎるとできない学生がついていけない。

もう1つの問題は教師側だ。担任になった教師は日々雑務に追われている。具体的には中間テスト、期末テストの問題を作成したり、宿題の採点をしたり、学校の活動に応じて（例えば：一年生は軍課のコンテストが、二年生は体操コンテストがある。）学生と一緒に練習したりしなければならない。そのため本来なら授業準備や、指導力向上にあてるべき時間や労力が十分に確保できない。1日24時間では足りないというのが実感だ。また、せっかく指導力をつけたと思っていたとしても、現場にその余裕や裁量の余地がなければ生かせられない。

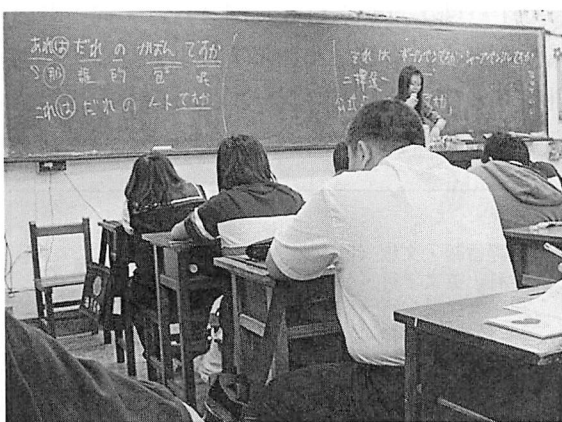


図2 筆者による授業（2）

4. おわりに

筆者は別府大学の日本語教員養成課程で勉強したことはとても役に立っていると感じている。台湾の伝統的な教え方ではなく、極力日本語を使うような環境を作りながら教えていく。そうすると、学生側は日本語を使えば使うほど日本語にもっと興味を持つようになる。

これからはさらに楽しめる授業を目指し、本校の生徒にとってもっと簡単にかつもっと楽に身につけられる授業を展開していきたいと思う。

最後、どうすれば学生が日本語に対する興味を持ち続けられるか、そして、どうすれば全員日本語能力試験に合格できるかが当面の課題である。

参考文献、サイト

国際交流基金HP：

<http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/country/2009/taiwan.html>

治平高校ホームページ：<http://www.cpshts.tyc.edu.tw>

治平高校のパフレット